

成功体験がもたらす患者の行動変容～血液透析導入患者を通して～

東邦大学医療センター大森病院 2号館4階東病棟

○茅根慶子（チネ ケイコ） 花見紗代 松本直子 野呂瀬有紗 細川さち子

【はじめに】

透析導入患者は透析療法や腎臓病についての理解が得られず、急に透析導入を迎える患者も少なくない。また疾患についての受け入れが不十分な状態で治療開始となるため、患者の多くが精神的ダメージや自己管理に苦しむケースが増えている。今回、緊急に血液透析を導入することになった患者への関わりを報告する。

【対象】

34歳男性。15年前から糖尿病に罹患し、糖尿病性腎症にて血液透析導入目的で入院。

【倫理的配慮】

本研究以外にデータは使用せず、患者へ個人が特定されないよう配慮することを説明し、同意を得た。

【看護の実際】

入院前のコンプライアンスは不良であり、医療者との信頼関係も良好とは言い難かった。透析への受け入れも悪く、患者の思いに寄り添うことに専念し、関係性を築いた上でパンフレットを使用し、情報提供を行った。指導を行っていく中では、成功体験を重点に置き、意欲的に取り組もうとしている姿勢についてフィードバックすることで自己効力感を高めていった。しかし理解を示すも、実際の行動変容には至らないということがわかり、日常生活に即した指導へ変更した。また体調の改善を自覚出来るよう関わったことで、透析の必要性を理解することができるようになり、その結果、患者の透析や自己管理に対する意識の変化が見られ、透析を受容し、自己管理を主体的に行うよう行動変容が見られた。

【考察】

患者の生活に即した指導や自己管理に対する成功体験を印象づけることで、患者の意識や意欲の変化が見られ、治療と自己管理の必要性を理解し、行動変容へつなげることができたと考える。